巻 頭 言

# 日本補綴歯科学会に求められるもの

The missions of JPS to benefit the stakeholders

昭和大学歯科補綴学講座　教授　馬場一美
Kazuyoshi Baba, DDS, PhD

## 社会的な動向とニーズへの対応

わが国の疾病構造は少子・高齢化に伴い大きく変化し，医療には生まれてきた命を大切に育てること，そして長くなった寿命をより良く生きること，つまり健康寿命の延伸という大きな課題が突きつけられている．公益社団法人日本補綴歯科学会（以下 JPS）はいち早く，「咬合と咀嚼がつくる健康長寿」をスローガンとし来たるべき超高齢社会に備えてきた．昨年の第 129 回学術大会では要支援，要介護に対する先制医療としての補綴歯科治療に焦点をあてたシンポジウム「食力向上による健康寿命の延伸：補綴歯科の意義」を日本学術会議歯学委員会と共催した[1]．さらに日本老年精神医学会と共同で咀嚼機能回復，食支援，栄養摂取を介した認知症対策という社会的に重要な課題にチャレンジしようとしている．結実すれば先制医療としての補綴治療による健康長寿の実現，ひいては社会的最重要課題である医療費削減にもつながると期待される．

そして，最近の話題としては CAD/CAM クラウンの保険収載やデジタル印象，デジタル X 線等の，いわゆるデジタル・デンティストリーの臨床普及である．現在わが国は，第三次産業革命による省人化・自動化を経て，IoT，ビックデータ，AI，ロボットなどによる，第四次産業革命に入っているといわれる．産業構造の変化という観点から歯科医療に目を転じてみると，歯科医療技術は着実に進歩しているが，実際には第二次産業革命が終了し第三次産業革命が進められるかどうかという状況である．一方で，高品質のデジタル X 線撮影や CAD/CAM クラウンによる治療の一般化により，通常の診療の中で画像・形態デジタルデータが「質の高いインプット」としてカルテに紐付けされた形で自動的に蓄積されており，AI を活用するうえで最も重要なビッグデータを構築する基盤がすでに整っている．今後，医療はゲノム・オミックス情報や生体センシングによるデータなどの情報も合わせて，個人の遺伝素因・環境要因を含む患者の状態を踏まえた「Precision Medicine」型へとパラダイムシフトが進むと予測され，その中で AI の役割は大きいが，こうした基盤があることはわれわれの領域の大きな強みであり，これを学会の叡智を結集して戦略的に活用したいものである．現状でも収集されたデジタルデータを活用したデータベース基盤型補綴治療の有用性が示唆されているが[2]，現在，各歯科診療施設に離散する形で存在するデジタルデータをビックデータ化することが歯科における第四次産業革命，Society 5.0 を実現するうえで最重要課題である．

## 誰のための学会活動か？

「補綴の矜持」とは市川元理事長が就任時に使われたフレーズであるが[3]，これまでの JPS が行ってきたさまざまな学術活動はまさしく「矜持」と表現するに値する．そのうえで，今一度，われわれの活動のターゲット，ステークホルダーが誰であるかを確認しておきたい．

昭和大学歯科補綴学講座
Department of Prosthodontics, Showa University

もちろん，会員が学会活動の主体であるとともに最も身近なステークホルダーである．学会員への情報提供，学術・臨床活動の支援，専門医へ向けたキャリアパスの提供など，学術大会や学術雑誌，各種委員会活動を通してこうした支援を継続，必要に応じて充実させてゆく必要がある．JPS会員であることのメリットを享受していただき，後述する歯科界ならびに人類に対する貢献をもって国内外にプレゼンスを示し，会員であることに誇りを持っていただけるような活動が必要である．そして何よりも若い会員にとって魅力のある学会とならなければJPSの未来はない．

次に，われわれの活動はJPS非会員の方も含めた歯科医師，歯科業界全体の利益に繋がらなければならない．補綴領域の新規医療技術の開発を目指し，そうした活動の果実を歯科界全体で共有する．さらには，高齢化により補綴治療のニーズが多様化・複雑化している中，地域包括医療における専門医のあり方を考える必要がある．歯科医師会をはじめとした地域歯科医療を支える医療従事者の方々との連携関係を強化し，彼らに対してどのような貢献ができるかを検討していきたい．そうした姿勢が専門医制度を成功に導くと考える．

最後に，国民の口腔健康増進に対して貢献する使命があることは言うまでもない．JPS会員の先進的な学術活動の成果は社会実装されたものも含めて，枚挙にいとまがないが，医療関連の情報があふれる現状を鑑みると，正しく有益な情報を適切に提供することも，それらと同じくらい，あるいはそれ以上に重要であり，国民をターゲットにした情報を注意深く選択し効果的に発信する必要がある．

「補綴歯科」

しかし，国民の何割が“補綴歯科”という用語を理解しているであろうか？長らく議論されてきたが“補綴歯科”という用語の周知は残念ながら実現されてない．情報発信の重要性は前述したが，従前とは異なるドラスティックな活動が求められる．そのためには予算処置も必要であろうし，「補綴の日」の設定に代表されるようなJPSを挙げてさまざまなアイデアを結集したい．学会活動の充実が大前提であるが，重要な点はわれわれのステークホルダーが誰であり，ステークホルダーに対してどのような情報をどのように発信していくかを戦略的に考えることであろう．

特に，国民を対象とした場合には，少なくとも社会に求められている変化，例えば，Society 5.0，第四次産業革命における補綴歯科の立ち位置については会員の間で共有する必要がある．また，秀逸なJPS会員の活動成果についても学会を上げて広報すべきである．あくまでも学術活動の主体は会員であり，学会が行うわけではない．JPS会員の国内外における活動は研究発表にとどまらず，社会実装に至り大きな社会貢献をしたものまで多岐にわたる．そうした情報を会員間で共有し，社会に対しても発信していくことがわれわれの責務である．そうした活動により，国民の健康増進に寄与することが可能となり，ひいては歯科界の，そしてJPS会員のメリットに繋がると信じている．

文　献

1）市川哲雄．高齢者における食べる力と先制医療．日補綴会誌 2021；13：105-108.
2）西山弘崇，馬場一美．デジタル・デンティストリーの近未来－超高齢社会における新たな補綴歯科治療の枠組み－　日デジ歯誌 2020；9：151-157.
3）市川哲雄．歯科の基盤を支え，創る補綴の矜持．日補綴会誌 2017；9：159-162.